

## 『五杉練若新学備用』卷中「論書題高下」小考

— 試訳と内容・表現に関する初歩的考察 —

山本孝子

はじめに

『五杉練若新学備用』は、南唐朝（十世紀中葉）に禅僧・応之により撰述された書物である。夙に散佚したものと考えられていたが、駒澤大学図書館に所蔵される朝鮮重刊本（天順六年（一四六二）の刊記あり）が公開され、近年その全容が明らかとなった<sup>1</sup>。その巻中には僧侶に関わる書儀に相当する内容が収録されており、特定の社会集団を利用対象として編まれたものである点、非常に遅い時代まで実用に供されていた点、朝鮮半島に残されていた点など、現存する書儀文献としては唯一無二の非常なる価値を有する。書儀の編纂様式・各模範文の書式・言語表現の淵源をたどる上で、敦煌発見の唐五代期の書儀や宋・司馬光『書儀』の不足を補う材料である。

巻中の内容について、順に標題を挙げると、「僧五服図」「龕柩

孝堂図」「吊慰儀」「祭文式様」「慰書式様」「諸雜書状式様」から構成されており、各種書簡文のうち凶儀に関わるものが「慰書式様」に、吉儀に関わるものが「諸雜書状式様」にそれぞれ収められる。また、「諸雜書状式様」には文例だけでなく、「論書題高下」として、敦煌吉凶書儀にいうところの「通例」あるいは「凡例」に相当する説明文が含まれる。本稿ではこの「論書題高下」<sup>2</sup>について、まずその釈文と試訳を提示した上で、その内容について他の書儀文献と比較しながら初歩的な考察を加えることとしたい。

### 一 「論書題高下」試訳

以下、釈文と試訳を順に示す。ここでは便宜上、全体を十四段に分け、内容に基づく見出しを附した。

## ① 手紙冒頭、書き出しの表現について

「某啓」者、或高或低、若不用大状及首銜書、即須用「某啓」。或平交亦同、即其間言語有尊卑去就。又若上父母師長伯叔長兄等書、不得著「某啓」。若著、又失礼。卑人与尊人須著「某啓」。不著、又失礼。尊人与卑人、即不用「某啓」。今舉尊人謝卑人有数等、第一「等」<sup>③</sup>尊称相重、即云、「某啓。伏蒙」。第二等只云、「伏蒙」。第三等「特沐」、或云「伏沐」。第四等「猥蒙」。第五等「猥沐」。第六「等」、「猥辱」。

「某啓」は、(受取人の身分が自分より) 高くても低くても、もし大状や首銜書(といった書式)を用いないのであれば、「某啓」を用いなければならない。対等な関係の相手の場合もまた同様であるが、言葉遣いは尊卑によって取捨選択する。また、父母、師、伯叔、同輩でも年長の者などへの書簡では、「某啓」と記してはならない。<sup>④</sup>もし記せば、また礼を失する。目下の者から目上の者へは「某啓」と記されねばならない。記さなければ、また礼を失する。目上の者から目下の者へは「某啓」と記す必要はない。いま列挙するに目上の者が目下の者に謝する場合には何等級がある。一番上の等級では敬語を重ねて、「某啓。伏蒙」という。二番目の等級ではただ「伏蒙」とだけいう。三番目の等級では「特沐」あるいは「伏沐」という。四番目の等級は「猥蒙」、五番目の等級は「猥沐」、六番目の等級は「猥辱」という。

## ② 相手からの手紙

謝尊人示書、若是大状者、即云「特賜書曲」。其次云「書誨」。又其次「尊誨」。又其次云「寵示」「寵翰」「寵緘」「寵誨」。又其次「華緘」「華翰」「瑤緘」等。又其次乃「示字」「來翰」。前人若是手書、即云「手扎」「手翰」「手緘」「親染」「親札」。近多「手」「華」者、言語似生。

目上の人からの書簡に礼を述べる場合、もし大状(の書式を用いるの)であれば、<sup>⑤</sup>「特賜書曲」という。その次(の等級の相手)には「書誨」、その次は「尊誨」、さらにその次は「寵示」「寵翰」「寵緘」「寵誨」、またその次は「華緘」「華翰」「瑤緘」など、その次は「示字」「來翰」という。相手(から来た書簡)が親筆ならば、「手扎」「手翰」「手緘」「親染」「親札」という。最近は「手」「華」を使った語がたくさん作り出されているようである。

## ③ 相手の来訪

謝尊人來即云「寵臨」「寵降」。俗即云「猥移軒蓋」。刺史即云「猥降旌旆」。宰相、節度使「台旆」「旌旆」。但是官人通云「朝騎軒蓋」。尊宿師僧云「猥降象駕」或「寵顧」。平交云「訪及」「光降」「光臨」。謝卑人云「過訪」「見訪」。

目上の人への来訪に礼を述べる場合、「寵臨」「寵降」という。俗

人であれば「猥移軒盖」という。刺史には「猥降旌旆」という。宰相や節度使であれば「猥降」台旆「猥降」旌旆」という。但し、官人に対しては一般に「朝騎軒盖」という。尊宿や師僧には「猥降象駕」あるいは「寵顧」という。対等な相手については「訪及」「光降」「光臨」という。目下の者に礼を述べる場合は、「過訪」「見訪」という。

#### ④ 相手の慰問

若在疾、謝尊人来、即云「曲垂」「示慰」「慰問」。其次云「問及」「見問」。

病気のときに目上の人が訪ねてきたことに礼を述べる場合は、「曲垂」「示慰」「慰問」といい、その次（の等級の人に）は「問及」「見問」という。

#### ⑤ 相手の恩情

謝宰相位人即云「鴻慈」「鈞慈」「台慈」、尊人即云「恩造」「尊造」「恩慈」「尊慈」。其次「仁慈」「仁造」。其次「仁眷」「仁私」「眷私」。其次「周勤」「勤眷」。

宰相の位にある人に礼を述べる場合は、「鴻慈」「鈞慈」「台慈」という。目上の人であれば、「恩造」「尊造」「恩慈」「尊慈」とい

う。その次は「仁慈」「仁造」、その次は「仁眷」「仁私」「眷私」、その次は「周勤」「勤眷」という。

#### ⑥ 脇付

僧上俗尊人即云「座前」。平交、「閣下」「座（左）右」<sup>⑦</sup>。其次「足下」。若長老応云「丈室」、師長父母「云」「几前」。僧与僧不言「法前」。又尊人与卑人或著「前」字。更卑人「処」或「省」字。

僧から俗人の目上の者に対しては「座前」という。対等な相手ならば「閣下」「左右」、その次は「足下」という。長老であれば「丈室」というべきで、師長や父母には「几前」という。僧は僧に對して「法前」とは言わない。また目上の者から目下の者には「前」と記す。さらに目下の者には「処」や「省」とする<sup>⑧</sup>。

#### ⑦ 手紙末尾の定型句

卑人与尊人書後「伏惟 仁慈俯賜鑒察」或「伏惟 尊明特賜念察」。平交即云「伏惟 鑒察」、尊人与卑人云「惟垂」「希垂」「伏望」、又其次「惟垂」<sup>⑨</sup>、即須云「照諒」「照察」。

卑人上尊人後云「拜上」、俗云「再拜」。或只云「状上」。卑人与尊人、即云「状達」「状送」、或即云「某書白」、又其次「書達」、其次「書送」。

目下の者から目上の者への書簡の末尾には、「伏惟 仁慈俯賜鑒察」あるいは「伏惟 尊明特賜念察」という。対等な相手であれば、「伏惟 鑒察」という。目上の者から目下の者へは「惟垂」「希垂」「伏望」、その次は「惟垂」で、「照諒」「照察」と（組み合わせて）いう。目下の者から目上の者へはそのあとに「拝上」というが、俗にいう「再拝」にあたる。あるいはただ「状上」とだけいう。目下の者から目上の人へは「状達」「状送」、あるいは「某書白」といい、その次は「書達」、その次は「書送」という。

#### ⑧ 署名・題書の字体・文字の大きさなど

卑人と尊人名須端謹小書或手書。咨目、手謹密、即草押号亦須端小。凡草置号於書上、題内銜位近状字低小置之。凡与尊人書題切須謹小書之、不可放意。草札容易言詞相諱之語、云呵呵。已來、上尊人書状聯字不得重点、須重書一字。

目下の者から目上の者へは名をきちんと整えて小さく書くか、自筆する。咨目でも文字は慎重に注意深く記し、草書での署名もきちんと小さく書く。草書での署名は書簡本文に書くもので、題書では官職名は「状」の字のそばに低く小さく書く。目上の人への題書は鄭重に小さく書かねばならず、思うがままに記すべきではない。手紙を書くときにはこぼが滑稽になりやすく「呵呵」などという。これからは目上の人への書状では、同じ文字が続く

場合におどり字は用いず、繰り返して一字書かねばならない。

#### ⑨ 相手からの書簡に対して

尊人有書来言述事、即須云「伏奉誨諭某事」。其問事、即云「伏奉寵問」、或云「敢不遵稟」或云「已審尊命」。平交即云「遵承嚴命」。

目上の人から書簡が届き何らかの用件が述べられていたときは、「伏奉誨諭某事」という。尋ねごとであれば、「伏奉寵問」、あるいは「敢不遵稟」、「已審尊命」という。対等な相手であれば、「遵承嚴命」という。

#### ⑩ 相手への思い

卑人上尊人即云「攀望」「倚望」「攀倚」「攀敬」。平交即云「瞻望」「詠瞻」、又其次「瞻矚」「翹恋」「企望」。又其尊人「深所景望」「尤多瞻望」「尤多瞻念」「弥增想念」。

目下の者から目上の人に（敬い慕う気持ちを示す場合）には、「攀望」「倚望」「攀倚」「攀敬」という。対等な立場であれば、「瞻望」「詠瞻」といい、その次（の等級）は「瞻矚」「翹恋」「企望」という。また、目上の人から（目下の者へ）であれば、「深所景望」「尤多瞻望」「尤多瞻念」「弥增想念」という。

⑪ 面識のない相手に対して

卑人上尊人未識者、即云「傾慕慈風」「久慕嘉猷」、又其次「久嚮仁美」。又尊人与卑人云「久茲嚮仰時多」。

目下の者から目上の面識のない人へは「傾慕慈風」「久慕嘉猷」、その次（の等級に）は「久嚮仁美」という。目上の人から目下の人には「久茲嚮仰時多」という。

⑫ 思慕の念

卑人与尊人云「久違尊徳」或云「違遠慈悲」。平交云「爰從阻遠」或云「久間仁慈」。其次「爰自睽離」又「倏茲阻遠」。尊人与卑人云「遐念阻遙」又「倏相違遠」、又其次「執別已來」或云「相別之後」。

目下の者から目上の人には「久違尊徳」あるいは「違遠慈悲」という。対等な相手には「爰從阻遠」あるいは「久間仁慈」という。その次（の等級に）は「爰自睽離」や「倏茲阻遠」という。目上の人から目下の者へは「遐念阻遙」や「倏相違遠」という。その次には「執別已來」あるいは「相別之後」という。

⑬ 手紙の用件

卑人与尊人「輒有情懇、容易干塵」或云「輒有私懇、特具啓陳」、

或「輒露心誠、仰于仁徳」。尊人与卑人云「有事披露、仰冀允聴」或云「偶有事緒、專此披陳」。

目下の人から目上の人へは「輒有情懇、容易干塵」「輒有私懇、特具啓陳」あるいは「輒露心誠、仰于仁徳」という。目上の人から目下の人へは「有事披露、仰冀允聴」あるいは「偶有事緒、專此披陳」という。

⑭ 全体に関するまとめ

已上各挙体例全在以尊卑酌中行之。庶免失敬大都以謙敬卑恭於人為上也。

以上、それぞれ列挙した体例はいずれも相手との関係を斟酌した上で利用すること。敬う気持ちを失することなく、謙虚にへりくだって相手を立てるように。

二 内容に関する注釈

(一) 書式の名称

「論書題高下」には、書式に関わる名称が見える。「諸雜書状式様」に具体的文例が示されるものも含めてここに抽出し、その特徴を略述する。なお、名称の上に附す数字は、本稿での見出し番号である。

① 「大状」<sup>14</sup>

「大状様」の標題で文例が示される。<sup>15</sup> 唐末から五代にかけて形作られた書式で、敦煌発見の書儀では、P.3449+P.3864（擬）刺史書儀（後唐）に比較的多く文例が見られるものの、まだ「大状」とは呼ばれていない。標題は「〱状」「〱状啓」となっており、同時に各書簡の用途が示される。また、大状の実例（P.3691）<sup>16</sup>「天福八年（九四三）都頭張立大状」、P.2985<sup>17</sup>「開宝五年（九七二）右衛都知馬使丁守勳大状」なども確認できる。司馬光『書儀』巻一「私書」には「上尊官問候賀謝大状」「謁大官大状」が収録されており、宋代にも使用が認められる。上申、祝賀、あいさつ、謝礼のための手紙で目上の人物に対して用いられた。

## ④ 「首銜書」

ここでいう「首銜書」とは、後文中で「大状」とともに収録される「前銜書」<sup>16</sup>のことであると考えられる。書簡冒頭は「具銜某」から書き出されており、書式の名称はこれに由来するのである。①の説明の通り、「某啓」の語は見られない。「前銜書」の標題には「亦呼為狀頭書」の注釈が見え、別名「狀頭書」とも呼ばれていたらしい。また、「謝尊人」<sup>17</sup>の標題のあとには「到稍尊即致大狀頭書」とあるほか、P.3449+P.3864（擬）刺史書儀」には「啓頭書」の名称も見える。「状」や「大状」、「啓」といった書式で書かれた書簡に関連して、あるいは付随するかたちで使用され

るものであったと推測されるが、敦煌発見の書儀や司馬光『書儀』に対応する書式を見出すことができず、現時点では確たる根拠を示すことはできない。

## ⑧ 「咨目」

「和尚咨目様」を収録する。「小師上和尚」の末尾には「凡修本師書、不可引閑詞、全乖格式。或有事、即別著一紙咨目（師に宛てた書簡では余計なことばを述べてはならず、（書儀にのっとり）形式通りに記さなければならぬ。ほかに他に用件がある場合は別に「咨目」にしたためる）」との説明がある。敦煌発見の資料の中にも関連する書式が見られるが、その名称が確認できるのはこの『五杉練若新学備用』のみである。<sup>18</sup>

## (二) 僧俗の別

禅僧を対象とした書物ということで、尊卑長幼、上下親疎だけでなく、僧俗の違いについても注意が向けられている。敦煌写本書儀でも、僧尼に関わる部分では「再拜」「頓首」の語の不使用が徹底されるなど、俗人の書儀とは異なる制限が見られた。<sup>19</sup> 以下に「論書題高下」に見られる僧俗の別についてまとめる。

## ③ 相手の来訪

相手の来訪に礼を述べる場合の表現が示される中で、僧俗の別

だけでなく、相手の社会的身分・地位に応じた使い分けも見られる。「象駕」は仏教を表す語であり、僧侶に対して用いる特徴的な語である。また「台」の文字に関しては、③「台旆」、⑤「台慈」のほか、敦煌発見の書簡にも「台巨」(P.2943<sup>+</sup> S.3438)、「台庭」(P.3197<sup>v</sup>)、「台慈」(S.11355)、「台階」(S.3438)とこった語の使用が確認でき、いずれも節度使の行為と結び付くものである。なお、「論書題高下」には明記されていないが、相手の行為に関わる語は平闕の対象である。<sup>20)</sup>

#### ⑥ 脇付

「僧与僧不言「法前」との説明があるが、「法前」は俗人が僧に対して用いるものであり、僧同士で互いに使用することはない。P.3691『新集書儀』『与僧人書』に「和尚法前亦云」、P.2646『新集吉凶書儀』『俗人与僧人書』に「和尚法前亦云」と見える。一方で、S.1284「西州弟師昌富与靈図陳和尚書」やS.11348の「門人賜紫沙門道安」から「都僧統大師」への書簡の封皮紙においても「法前」が用いられており、実際にはこの規定はそれほど厳格には守られていなかったのかもしれない。

#### ⑦ 「卑人上尊人後云『拜上』、俗云『再拜』、或只云『状上』」

目下の者から目上の人に対する書簡末尾の定型句について述べ、俗人は「再拜」を用いる箇所において、僧は「拜上」と記し、

敦煌写本書儀と同様に「再拜」の使用は避けられている。「状上」については、「小師上和尚」などに使用例が見えることから、僧侶いずれの場合にも通用する語であったと考えられる。

#### 三 待遇表現

①「手紙冒頭、書き出しの表現について」中に第一等から第六等まではつきりと設定されているほか、他の部分でもそれぞれに尊卑に応じて何段階かの表現が示されている。比較的細かく区分されているところもあるが、おおむね尊・平交・卑の三等級、或いは尊・卑のみ、尊・平交のみといったおおまかな表現の使い分けが示されるだけである。唐代の四海書儀に見られる五等級から、宋・司馬光『書儀』の三等級へ時代がくだるにしたがって、簡略化されていく。<sup>21)</sup>「論書題高下」はこの過渡期における状況を反映しているとも考えられる。また、この等級は絶対的なものではなく、<sup>22)</sup>⑭「全体に関するまとめ」にもあるように酌量の余地がある。具体的によどのような表現によって等級の差が表されているのか、「論書題高下」に見える待遇表現について、敦煌写本書儀と比較しながら考察を試みる。

#### (一) 同義の文字・語彙の組み合わせ

「論書題高下」の中で繰り返し使用されるのが、「仁」と「慈」の文字である。⑤では、宰相に対しては「鴻慈」「鈞慈」「台慈」、

目上の人に対しては「恩慈」「尊慈」と「慈」が用いられているのに対し、次の等級では「仁慈」「仁造」、その次になると「仁眷」「仁私」と、「仁」「慈」両方を用いた語を境に「慈」から「仁」へと移行している。また、①でも目上の人に対しては「傾慕慈風」、その次は「久嚮仁美」と、「慈」が「仁」よりも敬意を含んでいる。②も同様に、上行文書では「遠遠慈悲」、平行文書では「久間仁慈」となっており、「仁慈」を基準として、「慈」を目上の人に、「仁」を目下の者に用いる傾向があったことがわかる。但し、⑦では「仁慈」を目上の人に用いていることからわかるように、この二文字の間に尊蔑があるわけではなく、相対的にどちらがより丁寧かという違いがあったということに過ぎない。

①では、段階的に新しい文字を取り入れて、その組み合わせによって表現が作り出されている。一番上の等級では「某啓・伏蒙」を用いるが、二番目では「某啓」を除き、「伏蒙」だけが残される。次の段階では、「伏」を残して「沐」と組み合わせることによって「伏沐」の表現が作り出される。さらにその次、四番めの等級では、二番めの「伏蒙」をもとに、「蒙」を残して「猥」と組み合わせ「猥蒙」となる。五番めの等級では、三番めの「特沐」あるいは「伏沐」の「沐」を残しつつ、四番めで取り入れられた「猥」も使って「猥沐」の組み合わせが作られる。最後、六番めでは「猥」を残しつつ、新たに「辱」の文字が取り入れられる。このように、副詞的に働く一文字め「伏」「特」「猥」と、二文字め

の動詞「蒙」「沐」「辱」を順に選択して組み合わせることで敬意が示されている。このような方法は書儀の中で最もよく見られる待遇表現のひとつである。P.342『書儀』では「極尊」「稍尊」「平懷」「稍卑」に宛てた書簡文が示される中で、それぞれ順に「不審尊体何如。伏願勝豫（／動止勝常）」、「惟勝豫」、「願清勝」、「想清宜」といった表現により相手の健康への配慮が示されている。相手の健康を意味する語と、それを「願う」「祈る」の意を表す動詞の組み合わせで成り立っているが、「勝豫」「勝常」「清勝」「清宜」もまた文字を段階的に入れ替えることで新たな表現が作り出されていることがわかる。このほか、P.266『新集吉凶書儀』「内外「族」題「書」状様」のような題書の書き方もまた段階的な選択、組み合わせにより待遇が示される典型的な例である。

## (二) 要素の有無と礼の軽重

同義の文字や語彙を選択し、相手との関係に応じて使い分けるだけでなく、書簡を構成する要素の有無により礼の軽重が表される場合がある。<sup>(23)</sup> 上行文書に見える一部の要素について下行文書に対応する文言が見られないといった例である。①手紙の冒頭の文言について、最上位に用いられる「某啓」については、二等以下では対応する表現が見られない。尊卑に応じて同義語の文字・語彙が選択されるのではなく、表現の有無によって待遇が示されているのである。「某啓」と同じように、書簡冒頭に差出人が名乗る

ことにより、相手への敬意が示される形式は敦煌写本書儀にも見られる。P.3442『書儀』『四海吉書儀』では、「与極尊書」が「名白」で書き出されるのに対し、「与稍尊書」以下「与平懷書」、「与稍卑書」「与卑者書」にはこれに相当する文言が存在しない。<sup>24)</sup>

⑦手紙末尾の定型句においては、上行文書においては「伏惟 仁慈俯賜鑒察」、「伏惟 尊明特賜念察」であるのに対し、平行文書では「伏惟 鑒察」、下行文書では「惟垂／希垂／伏望」と「照諒／照察」の組み合わせとなっており、「仁慈」や「尊明」に相当する語が見られない。加えて、「伏惟俯賜／特賜」が「惟垂／希垂」のように簡略化されている。

### (三) 表現機能の選択

先に挙げた表現方法に比べるとあまり多くは見られないものの、表現機能の選択により待遇が示される場合がある。<sup>⑬</sup>では手紙の用件、自己の要求を伝える場面において、目上の人物に対しては、「輒有情懇、容易干塵」「輒有私懇、特具啓陳」、「輒露心誠、仰于仁德」のように依頼、お願いあるいは許可を求めるといった形式を採る。一方、目下の者に対しては、「有事披露、仰冀允聽」「偶有事緒、専此披陳」のように比較的直接的に欲求が表されている。

おわりに

以上、「論書題高下」の内容について検討してきた。書簡の書き

方を学ぶ過程で、模範となる文例を真似て書き写すことも必要ではあるが、表現方法の体系的理解にはやはりこのような説明がなければ難しかったに違いない。当時これを手元に置いて参考にしていた僧らにとって有益であっただけでなく、いま書札礼を復元する上でも重要な手がかりとなる。

はじめにも述べた通り、『五杉練若新学備用』は、書儀研究において非常に魅力的な資料であり、まだ未着手の課題も数多く残されている。本稿で取り上げたのはそのごく一部に過ぎず、資料の不足などから未解決のまま問題提起に留まった部分もある。今後もし引き続き敦煌写本書儀研究の成果を十分に反映させつつ研究に取り組み、全面的な校訂訳注の完成を目指したい。

#### 参考文献一覽

朴鎔辰

二〇〇九：「應之の〈五杉練若新学備用〉編纂とその佛敎史的意義」『印度學佛敎學研究』第五七卷第二號、五一～五七頁。

山本孝子

二〇一〇：「敦煌書儀中的『四海』範文考論」『敦煌写本研究年報』第四号、一四一～一六一頁。

二〇一一：「僧尼書儀に関する二、三の問題——敦煌発見の吉凶書儀を中心として」『敦煌写本研究年報』第五号、一二五～一四四頁。

二〇一二：「心之《五杉練若新学備用》卷中所収録の書儀文献初探——以其与敦煌写本書儀比較为中心」『敦煌學輯刊』二〇一二年第四期、五〇～五九頁。

二〇一四：「公私書札礼と社会秩序——書儀に見る〈おおよけ〉と〈わたく

し)——「敦煌写本研究年報」第八号、一六七—一八〇頁。  
 二〇一五 a : 「敦煌発見の書簡文に見える「語」——羽071「太夫と阿耶、阿叔等書」の書式に關聯して」『敦煌写本研究年報』第九号、九三—一〇九頁。

二〇一五 b : 「唐五代時期書信的物質形状と礼儀」『敦煌学』第三一輯、一—一〇頁。

※本稿はJSPS科研費若手研究(B)「中国・朝鮮半島・日本における書儀の普及と受容」に關する比較研究(17K1324)の成果の一部である。

注

- (1) 詳しい書誌情報については、朴二〇〇九、山本二〇一二を参照。
- (2) 駒澤大学電子貴重書庫 (<http://repokomazawa-u.ac.jp/opac/collecti-ons/462?fm=1508118407219>、最終閲覧日二〇一七年一〇月一五日)に公開されるデジタル画像(20/50—21/50)に拠る。
- (3) 釈文中で意より補った文字は「」内に示す(以下同様)。この朝鮮重刊本には脱字、衍字、誤字が疑われる箇所が少なくない。また、本文と注釈の文字の大きさにも乱れが見られる。
- (4) 「僧五服図」に拠れば、ここに挙げられる人物(伯叔・兄は僧・俗家ともに)五服の内である。次の文にいう「卑人尊人」とは五服の外的人物との関係についていうものと解釈できる。
- (5) 「大状」は上行文書であり、ここでは相手から受け取った書簡を指しているのではなく、礼状の書式について述べる。
- (6) 刊本では「上」の後に「人」の字が入るが、衍字であると判断した。『五杉練若新学備用』巻中「慰書式様・短封様」の末尾には「或云座前、或云左右、或云閣下、看尊卑用」とあり、その直前の「陽面 謹 謹上 某官座前、陰面 孝院小師 某 白疏」から、小師から官人に

当てた書簡で用いられた脇付であることがわかる。吉凶の別はあるものの、尊卑に応じた使い分けについては一致しており、ここも「僧俗尊人にたてまつる」と読むことができる。また、この「論書題高下」のすぐあとに収録される「上尊人閣遠書」には「座前等已論了」と見えることも矛盾がない。なお、「座前」については、「復書封様」に「謹謹上 大德座前 孝院小師 某 状封」とあり、僧侶の間で弟子から師に対して用いられたことがわかるが、僧に対する「閣下」の使用例はなく、僧・上人、俗・尊人と解することはできない。

(7) 「座右」は「左右」の誤りと判断した。「左右」の脇付は注(6)に引用した「慰書式様・短封様」のほか、敦煌写本書儀にも使用例が少なくない。例えば、「書儀鏡」「四海書題」に「内外文官三品云閣下、左右丞相、節度使云節下、五品云記室、已下侍者、左右唯執事之語、不論重平並通用。内外武官三品云廳下、太守管軍亦云廳下節下、折衝以下無管押与文官五品已下同」とあり、p.286 黃門侍郎盧藏用「儀例」「通例第二」にも「凡刺史云節下、將軍云廳下、有爵及五品已上云記室、小重云侍者、平懷左右」「云」足下、在位云執事」と見える。

(8) これに当てはまる文例としては、p.282 「書儀」「和尚闍梨答弟子書」の末尾「和尚闍梨名告<sup>名</sup>某乙省」が挙げられる。俗人間の書簡でも委曲など下行文書に多く見られる。

(9) 直前にも「惟垂」とあることから誤字が疑われるが、書簡文例などから読み替えるべき表現を見出せないため、ひとまず原文にしたがう。原文は「尊人与卑人」となっているが、後文の内容から順序が乱れていると判断した。例えば、p.286 「新集吉凶書儀」「内外族吉書」において、「上祖父母及父母状」「上伯叔姑及伯叔母状」「上兄」「姉」「姐夫」「状」といった上行文書の標題が「上」状であるのに対し、平衍・下行文書では「与弟妹書」「与子」「姪」孫書」「与姑舅兩姨弟妹書」「与「女」婿書」「夫与妻書」「妻与夫書」のように「与」書」となっている。手紙を意味する語として「状」の方が「書」に比べてより丁寧な表現であるといえる。

- (11) 僧は「再拜」の語を避けることから、この「俗」とは受取人をいうのではなく、俗人が書簡を書くときのことを参考までに記すものと解釈した。僧尼書儀における「再拜」の不使用については山本二〇一一を参照。
- (12) 「状上」は「小師上和尚」にも見えることから、俗人の場合だけをいうのではなく、僧俗問わず用いられたものと考えられる。
- (13) 原文では「已来」の文字が続くが、衍字と判断した。
- (14) 大状の書式に関しては、第六二回国際東方学者会議において「唐末五代から宋における漢文手紙文書の書式の変遷——P.349+P.354「擬」刺史書儀」の検討を通じて」と題する口頭発表を行っており、別稿にまとめる予定である。
- (15) 駒澤大学電子貴重書庫デジタル画像 (18/50)。
- (16) 駒澤大学電子貴重書庫デジタル画像 (18/50)。
- (17) 駒澤大学電子貴重書庫デジタル画像 (24/50)。
- (18) 山本二〇一五a。
- (19) 山本二〇一一。
- (20) 闕字の例としては「願訪」(S.76v)、「台慈」(P.3591v)などが、平出の例としては「寵喚」(P.2985v)や「訪及」(S.4571-1v)などが挙げられる。
- (21) 山本二〇一〇。なお、内外族書儀はさらに複雑で、例えばP.2645張敷『新集吉凶書儀』では封題の書き方は七段階に分かれている。
- (22) この点は、四海書儀において、特に目下の人物に対しては、家族間で使用されるよりも一、二等級上の丁寧な表現が要求されていたのと同様に、差出人と受取人の関係が絶対的な尊卑長幼・上下親疎に基づくものではないことを反映しているように思われる。山本二〇一〇。
- (23) 分量の多少と札の軽重との関係、特に紙数の問題についてはすでに山本二〇一五bにおいて検討している。
- (24) また、書簡の構成要素の有無は書式とも関わる問題である。「起居啓」と「起居状」の違いのひとつに「某啓」の有無が挙げられる。山

# How To Write Letters in the Buddhist community: the Text of Wushan Lianruo Xinxue Beiyong with a translation; critical and exegetical notes

YAMAMOTO Takako

The letter was the best medium for exchanging information and also helped establish mutual relationships. Epistolary writing was also an effective communication skill for monks to learn. Wushan Lianruo Xinxue Beiyong (五杉練若新學備用), edited by Yingzhi during the Southern Tang Dynasty, comprises three volumes in total, the second of which includes both letters and explanatory notes (論書題高下), to shed light on the expressions used to show the writer's respect for the receiver in the Buddhist community. This paper includes Japanese translations of the text as well as linguistic or philological analysis.

キーワード：『五杉練若新学備用』(Wushan Lianruo Xinxue Beiyong)、  
応之(Yinggzhi)、書儀(manuals for etiquette in epistolary  
writing)、待遇表現(Language in Social Contexts)